

# 許雄 Heo Ung ホ・ウン先生の言語学研究

権在一 Gweon Jaeil クォン・ジェイル

(ソウル大学言語学科教授)

## 1. 序言

눈피 Nunmoe ヌンメ (雪山) 許雄先生は国語学で卓越した学問の業績を残した学者であり、かつわが民族文化と精神をひるまず守った国語運動の実践家だった。この文はこのような許雄先生の学問世界を言語学研究に焦点を合わせて考察したいと思う。具体的には研究目標、研究方法、研究対象に分けて考察し、その意義を研究史的観点から考えてみたいと思う。従ってこの文は許雄先生の学問を研究史的観点から考察し、ひいては先生の学問でわれわれが今後継承しなければならない課題を求めることに意義がある。

許雄先生の国語研究は民族文化を引き継ぎ育てるところから始まった。青年時代崔鉉培先生の『우리말본 (朝鮮語文法)』に始めて対して自分が進まなければならない前途を決定する。そこで「一つの国の言葉はその国の精神であり、その民族の文化創造の原動力である」という思いをつとに心に刻んだ。朝鮮語を民族精神と文化の音であると考えたのである。このような考えは許雄先生の学問の土台となり、一生を一貫して備えた学問的態度だった。

そこで許雄先生の学問の性格を一言で言うならば「研究」と「実践」、二者の調和だと言えよう。先生の学問は国語研究を言語科学に昇華させ、これを土台に国語を守り、育てる実践運動を展開したということに意義がある。国語を客観化させ、科学的に研究だけをして国語運動の価値を無視する学問の態度、学問的土台なしに盲目的に国語愛を叫ぶ国語運動の態度、許雄先生はこの二者を平素もっとも警戒した。そのような面で許雄先生は卓越した学問の業績を残した国語学者であり、かつわが民族文化と精神をゆるがず守った国語運動の実践家であると評価するのである。

許雄先生の学問の業績は大きく2つと見ることができる。第1は、国語を研究するための理論の土台を作る業績である。1960年代に書いた著書『言語学概論』(1963年)、『改稿新版 国語音韻学』(1965年)を通じて国語研究に必要な言語学理論を樹立した。外来理論を批判的に受容しつつこれを独創的な理論に発展させた。第2は、国語資料を土台に国語の真の姿を明らかにした業績である。15世紀の朝鮮語体系を立て、この体系に従って古語文法研究を集大成して『우리 옛말본 (朝鮮古語文法)』(1975年)を編纂した。先生はこれを土台に一方では国語の歴史を追跡し、またもう一方では20世紀国語を研究してきたが、その結実は『20세기 우리말의 형태론 (20世紀朝鮮語の形態論)』(1995年)、『20세기 우리말의 통어론 (20世紀朝鮮語の統語論)』(1999年)である。

## 2. 研究目標

学問の研究対象として国語を研究する目標はおおよそ2つを考えてみることができる。第1は国語を科学的研究対象として客観化させて研究することである。第2は国語を民族文化を創造して率いてきた主体として見、研究することである。学者によってこの2つの目標のうち1つだけを重視してもう1つを軽視したり無視する例をその間の国語学界で多く見て来た。しかし国語を研究するに際して、科学的方法で国語の本質を究明する研究も重要であるけれども、国語に宿る民族文化の根を明らかにしつつ国語を発展させて守る意志を実践することも大変価値あることである。許雄先生は国語研究の正しい方向を上記の2つの目標を共に考えることであるとした。また一生国語を研究する間これを実践した。このような目標に従って国語を研究したので先生の学問の性格を「研究」と「実践」、二者の調和と評価している。

許雄先生の学問の目標がこのように立てられたことには周時経先生と崔鉉培先生の教訓に寄るところが大きい。

「自分の国を保ち、自分の国を興す道は国の大本を励ますことにあり、国の大本を励ます道は自分の国の言葉と文字を尊重して用いることが最も重要であるから、自分の国の言葉と文字がどの国の言葉と文字のようでなくとも、自分の国の言葉と文字を磨き、必ず万国と同じになることを図らなければならないだろうに、われわれは檀君以来徳政を施したそのすばらしい言葉と文字を研究したことがない」(周時経先生の「글모이(文集)」より)

「1つの民族の文化創造の活動は、その言葉によって初め、その言葉によって行い、その言葉によって蓄積し残すものであるから、朝鮮語は半万年[五千年]の間歴史の流れにおいて、われわれの創造的活動の基づいた道であり、延長であり、またその成果の及ぼされたものである」(崔鉉培先生の『우리 옛말본(朝鮮古語文法)』より)。

先生は国語についての高貴な価値を繰り広げた周時経先生と崔鉉培先生の精神を受けて、一つの民族の言葉はその民族の創造的な精神活動によって作られて整えられていく、民族精神のもっとも大きな所産であるだけでなく、このことはまた民族の固有の精神を形成するところで、他のいかなる要因よりももっとも大きな影響力を発揮するものであることを強調した。そして朝鮮語はわが民族がもっとも貴重なものとしてこれを育てていかなければならないであろうにもかかわらず、過去中国文化の影響を過度に受け、日帝侵略時代には民族精神と言葉と文字を組織的に破壊され、独立後も西洋文化の影響を過度に受け、わが民族の思考の基礎にはいまだに民族の言語と文字についての蔑視感がなくなっていることを指摘した。このようなわが言葉と文字を守り、育てなければならな

いという考えが先生の継続した学問の目標だった。結局先生は学問の目標が単純に学問のための学問に終わってはならず、われわれの正しい言語生活のために寄与しなければならず、学問がこれのために寄与できないならばその価値は半分以下に落ちるだろうと強調した。

許雄先生はその学問を整理する段階でいろいろの講義、講演、文で「わが言葉と文字を見て来た/見る 2つの目」というテーマで振替して国語学の目標について語ったことがある。『한힌샘 주 시경 연구 (白泉周時経研究)』第12号(1999)に載せた文によれば先生の考えは次の如くである。

われわれがわれわれの言葉と文字を見る目は2つである。限りなく愛する心をもってわれわれの言葉と文字を学び、研究し、守り、教える人たちがいるかと思えば、外国の言葉と文字を見るような人々もおり、より否定的な目は外国の言葉と文字に対してわが言葉と文字を蔑視する人々もあり続けてき、そして今もいるのである。前者は言葉と文字についての民族史観であり、後者は言葉と文字についての植民史観である。

このような2つの見解の対立は訓民正音を作った動機についての解釈にも現れる。歴史の記録によって、世宗の民族自主の精神と民本精神と世宗の独創的な頭と世宗の進取的性格が訓民正音を作り出した土台となったことを高く称揚する国語学者たちがいる反面、訓民正音はそのようなところで作られたのではなく、漢字の音を付けるために作ったと言い張る人々がいる。

このように過去でも今でもわが民族、わが歴史とわが言葉と文字を見て来た/見る目が2つであるが、このような歴史を担って現実を生きていく今のわれわれはわが言葉と文字をどのような目で見なければならず、またどのような態度で学ばなければならず、研究しなければならず、教育しなければならぬだろうか？

そこでわれわれは、「**金富軾**\*- **崔萬理**\*\* - **申欽**\*\*\*」のような漢学の儒者たちの国語観を退けて、「**世宗大王**\*\*\*\*- **金萬重**\*\*\*\*\*- **周時経**- **崔鉉培**」の系列をつなぐ線で国語を見て研究し、教育しなければならぬだろう。日本の植民史観がわれわれの間にまだ残っているように、日本の学者たちがわが言葉と文字を研究したその態度が今もわれわれ国語学者たちの間にまだ残っている現象をわれわれは正しく見なければならぬだろう。

\* 【注】(1075年-1151年) 高麗の官僚、儒学者。『三国史記』の編纂者。

\*\* 【注】(?-1445年 [世宗29年]) 集賢殿副提学だった崔萬理は訓民正音に反対する上疏文を提出したことで知られる。

\*\*\* 【注】(1566年 [明宗21年]-1628年 [仁祖6年])。文臣。

\*\*\*\* 【注】(1397年-1450年) 李朝第4代国王。在位1418-50年。訓民正音の公布だけでなく、農業の重視、文化事業の推進、儒学の導入その

他の業績が大である。

\*\*\*\*\*【注】(1637年 [仁祖 15年] -1692年 [肅宗 18年])。西人派の文臣で小説家。代表作：ハングル小説『九雲夢』、『謝氏南征記』。漢文崇拜の当時の風潮の中では画期的なことであり、朝鮮国文学発展の先駆者。

### 3. 先行研究の継承と独創的発展

許雄先生の学問の研究方法のもっとも大きな特徴は先行研究を継承してこれを土台に独創的に発展させたことと言えよう。学問は先行研究の方法論を継承して発展させるのだが、批判的な観点至ってこれを独創的に発展させなければならぬと見た。学問研究の成果とはいかなる土台もなしに突然なされるものではなく、いつも先行研究の伝統が土台となってこれを継承し、修正、補完して完成され、発展していく。そこで先生は先輩がなした成果を受け継ぎ、新しい理論を独創的に立てていく研究方法を強調した。

許雄先生は平素このような学問の研究方法と関連して論語為政篇の次の言葉をしょっちゅう引用した。「學而不思即罔，思而不學即殆」（學びて思はざれば即ち罔し [くらし]，思ひて學ばざれば即ち殆し [あやふし]）。他人の理論ばかりを熱心に勉強し、自分の独創的な研究をしないならば、学問が暗くなり、反対に他人の理論は顧みず、自分の独創的理論だけを繰り広げるならば、学問が危なくなるという意味である。従って研究者は 2 つの道すなわち先行研究の成果も受容し、これを土台に自分の独創的理論も立てていくことが学問研究の正しい道であるとした。

先生は周時経先生以来よく準備された国語学の高い水準の幹が厳然とあるのに、それをいたわりもせず、日帝時代に日本の学者たちが残した業績に足を置いている人もおり、西洋の理論を批判もなしにそのまま国語に適用する人もいることを指摘し、これを植民地的学問の風土だと強く批判した。先生は自らその学問は周時経先生に始まり、崔鉉培先生で精巧な仕上げを経た理論と記述方法を受け継いだ、先覚者たちの伝統的学問を継承していることを明らかにした。

国語をわが民族がもっとも大切にし、これを育てていくべきものだから、これを研究することを一生の課業として担われた方が周時経先生でいらっしや、先生が早い時期から国語を研究しようという考えを持った理由はこのような周時経先生の高貴な精神の価値を受け継いだことであると自らおっしゃった。また資料に広く精通していることと前後の矛盾のない体系を立てた崔鉉培先生の『우리말본 (朝鮮語文法)』の理論を継承した。先生は高等普通学校 3 年の時に崔鉉培先生の『중등조선말본 (中等朝鮮語文法)』を読み、それに感銘を受けてその後に出た『우리말본 (朝鮮語文法)』を、高等普通学校を卒業する前にそれ

なりに理解しつつもっと読み、その影響からその時崔鉉培先生のいた延禧専門学校に進学した。先生のこのような考えは先生の力作『우리 옛말본 (朝鮮古語文法)』にそのまま表現されている。

「それ故わたくしにおいて『우리말본 (朝鮮語文法)』の体系は、わたくしの幼少時からわたくしの肉と血と骨に染み込んでいる、わたくしの学問の実を占めている部分である。それだけでなく、わたくしが『우리 옛말본 (朝鮮古語文法)』を書くことを一生の願いとしたのがまさにこの時期である。それ故『우리 옛말본 (朝鮮古語文法)』の体系が『우리말본 (朝鮮語文法)』のそれを骨子としていることは当然のことである。本の題名を『우리 옛말본 (朝鮮古語文法)』としたのももっぱら先生の学恩を忘れないというわたくしの小さな真心からである」。

しかし先生は単純に正統性の継承にとどまらず、自ら独創的な理論体系を樹立し、今まで解くことのできなかつたいろいろの学問的な問題を解決しようとした。

『우리 옛말본 (朝鮮古語文法)』を書きつつ自ら曰く：「すべての点が『우리말본 (朝鮮語文法)』と同じではあり得ない。まず術語を多少直したところがあるのだが、それはその文法範疇の本質を把握するのに助けになるかと考えてであり、細部の体裁が異なつたところも何か所もあるが、その中には現代語と15世紀の古語の言葉の組織自体が異なるために当然そうなつたところもあるけれども、ある点はそうする方がよいだろうという考えから直したところもある。しかし後者の場合においてもいたずらに新奇であることを言い立てて独創的なふりをしようという気持ちが分け入つたものではまつたくない」。

#### 4. 理論受容の多様性

許雄先生の学問の理論的な根が周時経先生と崔鉉培先生にばかり置いたのではなかった。先生の学問の方法論は国内外のいろいろな理論と思想に根を持っている。先に考察したように近くは周時経先生と崔鉉培先生そしてわが先人たちに根を置いており、国外ではヨーロッパの機能=構造主義言語理論、アメリカの記述=構造主義言語理論、変形生成文法理論をあまねく参照している。

先生は「言葉と精神の関係」を説明しつつ国内で理論を求めた。金萬重の西浦漫筆の「言葉と人間の心とは同じものの内外に過ぎないものと見ている」で言葉と精神の関係を説明し、言葉と民族については周時経先生の考えを受け入れた。

「ある民族が住む区域は独立の地盤であり、その人種は独立の身であり、その言葉は独立の性である」とした周時経先生の考えで自分の「国を保ち、自分の国を興す道は国の本質を励ますことにあり、国の土台を励ます道は自分の国の言葉と文字を尊重して用いることがもっとも重要であることを求めて強調した。

許雄先生は「わが国では国語学と言語学はまったく関連のないもののように考える傾向が強い。しかし国語学者は一般言語学の理論で武装されずには正しい国語学の理論を立てることはできないということをつい分前から切実に悟った」といろいろの文で強調している。そこで許雄先生はわれわれの主体性ある国語学の樹立のために韓国で発達してきた国語学者たちの業績をよく継承しなければならないという点を強調しつつも、国語学研究には必ず一般言語学の支えがなければならない、一般言語学で研究方法を導入しなければならないことを主張している。

ソシュールの「ラング」と「パロール」を許雄先生は言葉の「갈무리 galmuri (貯蔵)」と「부려쓰기 buryeosseugi (使用)」と説明しつつ、東洋と西洋でその理論の根を求めて来た。貯蔵された言葉を『언어학 (言語学)』(1981:22-37 ページ)で次のように説明している。

般若波羅蜜多心經に「すべての物質は虚と違いがないから、虚はすべての物質と違いがない。物質はまさに虚であり、虚はまさに物質である(色不異空、空不異色、色即是空、空即是色。/色は空に異ならず、空は色に異ならず。色はすなわちこれ空、空はこれすなわち色なり。)」という言葉がある。物質の世界はすべてがみな同じところも同じ形も維持できず、いつも変化してやまない。すべてのものがあっては変わり、変わってはなくなる。すべてがみな瞬間的な存在に過ぎない。しかし人間はこの変化してやまない物質世界の底に変化しないで永久に、または半永久的に存在する何かがあることを探し出す才知を持っている。

プラトンも実地にあらわれているものは偽りの現象に過ぎず、この瞬間的で個別的な偽りの現象の底に真に存在する「イデア」があるとした。これは空間や時間にその場を持たない永遠のものであるとした。

手の施しようもなく複雑で、目まぐるしく瞬間的な世界で、より秩序あり、より恒久的な何かを求めようという努力は東洋でも西洋でも同じだが、このように説明した貯蔵された言葉がまさにラングであり、これを直接使用する言葉がパロールである。

このようなラングとパロールに対する許雄先生の独創的な解釈はこれらの相互関係に関するものである。人間が言語能力を持っているからパロールを土台としてラングを貯蔵し、パロールはラングを使用するのであると解釈した。そしてラングを言語活動と解釈し、ラングを媒介としてこれら 2 つの関係を説明した。

ソシュールがラングをパロールより優位に置き、一時的に言語学の対象をラングと限定したが、許雄先生はラングにその研究の中心を置きつつもパロールの研究を排除しない。「ラングの研究とパロールの研究に大きく分けられるが、ラングの研究がその中心となる。/ そのパロールとしての物質的な実現を研究する部門は

音声学である。 / 使用された物質的（生理=物理的）言葉は大変複雑で、手の施しがたいものとして言語研究から疎外されてはならない。外にあらわれた使用される言葉は、もっと本質的な、貯蔵された言葉の存在を証言してくれる。それ故われわれは貯蔵された言葉と使用された言葉を互いにつき合わせていき、言語研究をしていかなければならない。

一方、ソシュールの共時態と通時態の区別、通時態に対する共時態の優位、この2つの時態の独創的な研究領域の存在等、この2つの対立の相互の関係について許雄先生はそのまま受容しつつも、共時態と通時態の概念を社会言語学の観点から解釈を加えている。「共時言語学は言語体系を時による変化だけを考慮しないのではなく、所や社会集団による違いを考慮せず、もっぱら一つの言語体系にのみ焦点を合わせて研究する言語学の一つの部分」と把握したのがその例である。

許雄先生は現代言語学理論でも必要な概念を積極的に受け入れた。「깊고淺（表構造）」[表層構造]と「깊고淺（裏構造）」[深層構造]は変形生成文法理論から受け入れた。文の層位を、意味を反映する裏構造と実際の発話に実現する表構造に二分して、この2つの構造の間を変形によって連結させようというチョムスキーの考えを通じて裏構造と表構造の概念を受け入れ、文法で一機能法と二機能法を説明し、主体=対象法を説明した。

また子供は言葉を学ぶ過程で習得する規則性は後天的であるよりは先天的だというチョムスキーの言語観を批判的な態度で受容している。「多分人間は生まれた時から本（模型）をもって生まれるのではないかという学説がたいへん有力なものとして主張されている。すなわち子供は言葉の規則の本（模型）をもって生まれるものだが、出生以後周囲の言葉を聞いてこの本（模型）からの演繹と言葉の洪水からの帰納の2つの方向が互いに補う作用によって規則を自分のものとするのではないかと推測される」。

## 5. 理論と実証資料の合致

国語研究で考えなければならない問題の中で一つは新しい理論の受容に偏るあまり、具体的言語事実に対する研究をいい加減にしてきたことではないかという点である。これは今日の言語学が一般的に抱いている問題でもある。具体的言語事実についての研究は言語理論の基礎を固めることであり、したがって新しい理論の開発は言語事実それ自体についての研究が蓄積される時可能なのである。この問題は究極的には一般言語学と個別言語学の関係がどのようであらねばならないかという問題でもある。

一般言語学と個別言語学である国語学との関係を許雄先生は『言語学概論』（1963年）で次のように明らかにしている。

「わが国に西欧の言語学が輸入されるのは独立前からだと見ることはできるが、その時期においては、もっぱら日本の学者たちの手を経てわれわれに受け入れられたものである。しかしわが国にも従来言語学がまったく興らなかったのではない。甲午改革\*以後われわれの先人たちは国語学の研究に力を注ぐ傾向が顕著にあらわれたが、国語学が言語学の一種であるのであれば、このような国語学研究はすなわち言語学の研究だったのである。ところでおかしなことにはわが国では、言語学と国語学は異なる学問であるかのように錯覚されてきた。言語学とはすなわち西洋のいろいろな国の言葉に関する学問であり、その素材や術語はすべて西洋語で出来ていなければならないかのように考えられてきた。言語学が西欧で高度に発達し、そしてわれわれはそれを学んできたのでこのような考えを持つようになったのは当然のことであるかもしれない。しかしこのような考えは大きな過ちである。言語学はそんなに遠いところにある学問ではない。言語学は言語すなわち言葉を研究する学問であり、朝鮮語を研究する国語学はすなわち言語学なのである。われわれにおいては、むしろ国語学の堅固な土台の上に、一般言語学を建設していくのが適当であり、そうしてのみわが国の言語学の堅固な発展を成すことができるのである」。

\*【注】(1894-1895)。韓国では甲午更張と言う。

言語の中に作用している一般原理あるいは普遍原理を探し出すことが言語学の根本の課題とならなければならないというのには異論の余地がない。しかしこのためには個別言語についての深い研究が先行しなければならないという事実をいい加減にすることに問題がある。個別言語の深い研究なしには一般言語学は架空のものとなるほかない。個別言語学と一般言語学は関心の核を別々に持ちつつ共存しなければならない。許雄先生の学問には言語学のこのような道理が込められている。

これを土台に朝鮮語を研究するに際し、許雄先生は朝鮮語資料の正確な記述を基盤とした。ある与えられた理論の枠に従って朝鮮語資料を解釈する方法ではなく、実証的資料を土台に機能的に朝鮮語の構造に合う枠を作り、研究の方向を提示した。「古語を研究するに際してはわれわれはひたすら機能的な方法に頼るほかない。われわれが持っているすべての文献を分析して、ここに文法規則を帰納的に発見していくしかないのである。しかしいくら多くの文献をすっかり検討したとしても、それに用いられた言葉は無限の言語遂行の一部分にすぎないのである。/ 文献は肯定的な資料は提供してくれるとしても否定的な資料は提供してくれない」(『우리 옛말본 (朝鮮古語文法)』412 ページから)。

## 6. 体系的な研究方法

許雄先生は学問研究で体系を特に強調した。学問の体系を立てることを一軒



の家を建てることに例えて説明した。家を建てる時にはその家に住む家族の構成と家に入る所帯道具に合うように設計して家を建てなければならない、設計をするにしても家を建てる根本原理は知っていなければならない、この根本原理に違えば家は倒れてしまうとした。

このような意味で許雄先生の学問は構造主義に焦点を置いた。構造主義は体系を成す要素とこれらとの間の関係を求める。従って体系を成す言語要素の項目を確定し、この項目の間の関係を設定する方法を強調する。

文法研究の例を挙げて体系的な研究方法について考察しよう。先生は文法を、上では文を限界とし、下では形態素を限界とし、大きい言語形態をそれより小さい言語形態に割り、小さい言語形態をそれより大きな形態的構造を、統語論(=統辞論)は統語的構造を対象として体系を立てた。この2つの構造はなんらかの表現を成す2つの直接成分の依存あるいは自立の可否に従うのだが、なんらかの表現を成す2つの直接成分が2つの構成から出来ているとする時、2つのすべてが自立形態素ならば、それは統語的構造であり、どちらか片方が依存形態素であるかすべて依存形態素ならば、それは形態的構造だと説明した。このように文法の記述は2つの分野から体系を立てて解釈するのが妥当だとした。

また統語論の理論を展開しつつも、体系的な方法に依存した。その一つの例が統語的構造の間にあらわれる「이끌림 iggeullim イクルリム引かれの規則」を定立したことである。諸言語形態が文を組み立てる時には、文の各々の成分の間に互いに引き、引かれる力学的関係が結ばれるのだが、この力の中心が述語であるとした。すなわち文は述語を中心に、文の他の成分がこれに引かれて作られるのだが、その間には引かれの規則が成立していることを体系的に記述した。「述語はその文や文節内にある副詞語と目的語 - 位置語 - 道具語 - 比較語を率いて、最後に主語を率いる」という規則を始め、連体修飾語と名詞の主導語、対立語、独立語等にあらわれる引かれの規則をすべて体系的に定立した。

「文の変形」という概念を新たに提示したのもやはり同じである。基本的な文の構造は、固まった表現ではなく、一つの文の終止法語尾を他の語尾に変えるか、または語尾を換えずに一つの文を他の大きい文の中に抱かせるか、また一つの文の終止法語尾を他の語尾に変え、文を終えずに、再び他の文につなぐ現象を第1次文の変形という概念で解釈した。このような第1次文の変形を経た文をより簡便に文の構造を調整できるのだが、文の成分を減らしたり、移したり、互いに取り換えることを第2次文の変形とした。なくてもよいと考える文の成分を減らしてなくしたりもし、特別な表現効果をねらってもともとあった場所を他の所に移したりもし、時には言葉を効果的に表現するために一つの文の成分をほかの文の成分に代えることがあるのだが、このような第2次変形は第2次変形の場合より、話し手の意思がもっと自由に作用するとした。

述語が担った文法情報を提示することによって統語範疇を体系的に考察した。述語は他の文の成分に比して多くの文法情報を担っていることを根拠に、文法情報が実現される方法を、用言語尾による場合と補助用言の語幹による場合に分けて提示した。用言語尾による場合は、話し手の心理的態度と関係があるもので、聞き手尊敬法、主体尊敬法、客観世界に対するものとして時制法を体系的に設定した。補助用言の語幹による場合は、否定、アスペクト、奉仕、希望、試図、可能、強調等の範疇を体系的に設定した。

## 7. 学術用語

許雄先生は学術用語はできるなら固有の土着の言葉を選んで用いるように努力した。しかしあまりにぎこちないものは避けており、漢字語と土着の言葉の混合語を作って用いたことも多いが、これはこれから先学術用語を作る一つの方向を提示するためであるとしている。

## 8. 研究対象

許雄先生の学問の業績は深みがあるだけでなく、研究対象も真に広い。言語理論から国語の記述に至るまで、音声学から統辞論に至るまで、そしてこれを越えて国語政策に至るまで研究の幅は広い。

許雄先生は国語を研究するために外来理論を受け入れ、これを土台に独自の理論体系を立てた。1958年に刊行した『国語音韻論』(1958, 正音社: 菊版 296 ページ) はわが国で初めて音韻論の共時的、通時的研究の理論を作り、これにしたがって国語音韻論を記述した著書である。上ではソシュールの理論からヨーロッパの機能=構造主義音韻論理論(特にプラハ学派の理論)とアメリカの記述=構造主義音韻論理論に至るまで、そして訓民正音創制に盛られているわが固有の音韻理論まで求めて、国語音韻論研究の土台となるべき理論を整然と体系にした。上の本は1965年に大幅に修正、補完されて『개고신판 국어음운학(改稿新版 国語音韻学)』(1965, 정음사(正音社): 菊版 552 ページ)として再び刊行され、それから20年後『국어 음운학-우리말 소리의 오늘·어제- (国語音韻学-朝鮮語音声の現在・過去-)』(1985, 샘문화사(泉文化社): 新菊版 606 ページ)として完成した。

なによりも言語学理論を明らかな体系として立て、学界に紹介したのは1963年に刊行した『言語学概論』(1963, 正音社: 菊版 391 ページ)である。ヨーロッパとアメリカの多様な言語理論を土台として先生の観点から創意をもって枠組みを作って立てたわが国初の言語学概論書である。この本はわが国で言語学を研究史、国語学を勉強するに際して長い間主要な指針となったという点で高く評価される。この本を1981年に執筆して新しい本を出した時、学界ではこの

本を引き続き刊行することを懇請したことがあったほど当時の学会に及ぼした影響は大きかった。『言語学概論』に盛られた内容をその目次を通して具体的に示せば次の如くである。

1. 言葉とは？
2. 言語の状態と変化
3. 言葉の音—1（音声学）
4. 言葉の音—2（音韻論）
5. 意味（意味論）
6. 文法
7. 文字
8. 言葉の変化—1（音の変化）
9. 言葉の変化—2（意味の変化）
10. 言語の比較
11. 方言
12. 言語学の足跡

それ以後『言語学概論』の理論的内容を大きく修正して補完し、『언어학—그 대상과 방법—（言語学—その対象と方法—）』（1981, 샘문화사（泉文化社）：新菊版 497 ページ）を刊行し、そしてこの本を簡略に整えたのが『고친판 언어학개론（改訂版 言語学概論）』（1983, 샘문화사（泉文化社）：新菊版 334 ページ）である。1981年の『언어학—그 대상과 방법—（言語学—その対象と方法—）』に盛られた対象をその目次を通して具体的に示せば次の如くである。

1. 言葉とは？ —言語学の研究対象—  
言葉의 갈무리 galmuri（ラング）と부려쓰기 buryeosseugi（パロール） /  
言葉の構造 / 言葉と精神 / 言葉と人間社会
2. 言葉の状態と変化  
言葉の矛盾した2つの姿 / 2つの方法の違いと相互依存
3. 言葉の音（1）（音声学）  
音声学 / 音声器官とその作用 / 音声の分類 / 音声を研究する  
音声特徴
4. 言葉の音（2）（音韻論）  
音素 / 音素の実現とその対立 / 音素の組織 / 音節 / 剰余特徴  
と韻律素 / 音声学と音韻学
5. 形態素と単語（形態音素論と意味論）

形態素とその表記 / 単語とその意味 / 単語のシニフィアン (音) – シニフィエ (意味) の関係 / 単語の組織

## 6. 文法

文法の歴史と種類 / 文法学の2部門 / 形態論 / 統語論 / 記述文法の欠陥 / 変形=生成文法

## 7. 文字

文字の発生・発達 / 表音文字化 / 訓民正音 / 文字の不条理とその反作用 / 文字と言葉

## 8. 音声変化

音声変化のいくつかの種類 / 統合的關係で起きる変化 / 連合的關係で起きる変化 / シニフィアンの代置 / 音韻の変遷 / 音韻法則

## 9. 意味の変化と語彙構造の変化

意味変化の種類 / 意味変化の契機 / 語彙構造の変化 / 語源研究

## 10. 言語の比較

言語の親族関係 / 親族関係の証明 / 方言地理学

## 11. 方言

標準語 / 方言 / 方言の研究 / 方言地理学

## 12. 言語学の足跡 (言語学史概要)

18世紀まで / それ以後の言語研究

## 9. 結語

許雄先生は国語研究を科学に昇華させ、これを土台に国語を守り、育てる実践運動を展開した。先生は国語を研究するための独創的理論を作り、実践的に国語の真の姿を明らかにした。先生の国語運動は国民の文字生活はハングルだけで、言語生活は易しく正しくきれいな言葉でなし、わが言葉と文字の価値を高いたただく活動だった。このような面で許雄先生は卓越した学問の業績を残した国語学者であり、かつ民族文化と精神をたゆまず守った国語運動の実践家だった。

許雄先生の学問研究の方法の最も大きな特徴は先行研究を継承し、これを土台に独創的に発展させたことであると言えよう。先生が継承したものは国内外のいろいろな理論と思想である。近くは周時経先生と崔鉉培先生、わが先人たちに根を張り、国外ではヨーロッパの機能=構造主義言語理論、アメリカの記述=構造主義言語理論、変形生成文法理論をあまねく参照している。

先生は国語を研究するに際して、国語資料の正確な記述を基盤とした。ある与えられた理論の枠に従って資料を解釈する方法ではなく、実証的な資料を土台

に国語の構造を求める研究方法を提示した。そして学問の深みを加えただけでなく, 言語理論で国語の記述に至るまで, 音声学から統辞論に至るまで, そしてこれを越えて国語政策に至るまで研究の幅を広げた。

このような許雄先生の国語研究の方法と対照を今やわれわれが継承して再び独創的な理論で発展させていかなければならないだろう。これがわれわれすべてに先生が残した課題である。

## 参考文献

- 권재선 (2005), 허웅 박사님의 국어 연구에 대한 국어학사적 평가, 한글학회 역음 (2005), 눈피 허웅 선생의 삶, 한글학회. (權在善(2005), 許雄博士の国語研究に対する評価, ハングル学会編(2005), Nunmoeヌンメ (雪山) 許雄先生の生涯, ハングル学会)
- 권재일 (2005), 허웅 선생의 학문 세계, 김차균 외 공저 (2005), 허웅 선생의 우리말 연구, 태학사. (權在日(2005), 許雄先生の學問世界, 金次均他共著(2005), 許雄先生の朝鮮語研究, 太学社)
- 김차균 외 공저 (2005), 허웅 선생의 우리말 연구, 태학사. (金次均他共著(2005), 許雄先生の朝鮮語研究, 太学社)
- 한글학회 역음 (2005), 눈피 허웅 선생의 삶, 한글학회. (ハングル学会編(2005), Nunmoeヌンメ (雪山) 許雄先生の生涯, ハングル学会)
- 허웅 (1963), 언어학개론, 정음사. (許雄(1963), 言語學概論, 正音社)
- \_\_\_\_ (1965), 개고신판 국어음운학, 정음사. (許雄(1965), 改稿新版 國語音韻學, 正音社)
- \_\_\_\_ (1975), 우리 옛말본-15세기 국어 형태론-, 샘문화사. (許雄(1975), 朝鮮古語文法—15世紀國語形態論—, 泉文化社)
- \_\_\_\_ (1981), 언어학-그 대상과 방법-, 샘문화사. (許雄(1981), 言語學—その対象と方法—, 泉文化社)
- \_\_\_\_ (1983), 고친판 언어학개론, 샘문화사. (許雄(1983), 改訂版 言語學概論, 泉文化社)
- \_\_\_\_ (1983), 국어학-우리말의 오늘·어제-, 샘문화사. (許雄(1983), 國語學—朝鮮語の現在·過去—, 泉文化社)
- \_\_\_\_ (1985), 국어 음운학-우리말 소리의 오늘·어제-, 샘문화사. (許雄(1983), 國語音韻學—朝鮮語音聲の現在·過去—, 泉文化社)
- \_\_\_\_ (1995), 20세기 우리말의 형태론, 샘문화사. (許雄(1995), 20世紀朝鮮語の形態論, 泉文化社)
- \_\_\_\_ (1999), 20세기 우리말의 통어론, 샘문화사. (許雄(1999), 20世紀朝鮮語の統語論, 泉文化社)

(菅野裕臣訳)

【訳者注】文中 [ ] は訳者が読者の理解のために付けたものである。なお訳語の決定について権在一先生にいろいろとお世話になったことを感謝申し上げます。－菅野裕臣

(권재일(2005), 허 응 선생의 언어학, 나라사랑 110 집, 외솔회, 2005.9.23. 43-60. (権在一(2005), 許雄先生の言語学, 『Narasarang ナラサラン (愛国)』, 110 輯, Oesolhoe ウェソル (孤松) 会, 2005.9.23.43-60 ページ))